

京都橘大学 大津市との連携事例

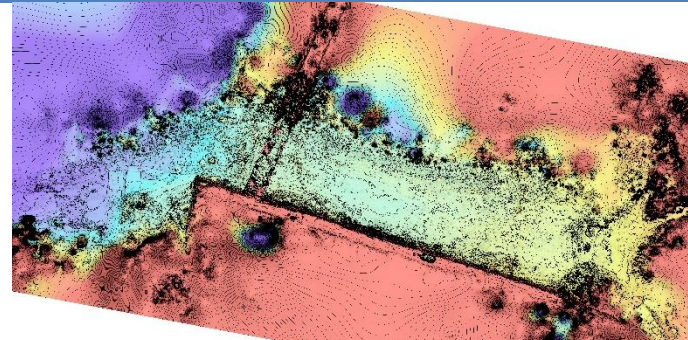
自治体の課題(ニーズ)



大津市には旧石器時以降の約400ヶ所の遺跡が存在している。特に注目されるのが琵琶湖の湖底で見つかっている水中遺跡で、日本有数の遺跡密度を誇っている。その中でも明智光秀が1571年に築いた坂本城は、琵琶湖の水位低下時に普段水中に沈んでいる石垣(湖中石垣)が露出することで著名である。

湖中石垣は通常時は水中にあるので、陸上の遺跡に比べ、詳細な調査や遺跡の保存状態のモニタリングが困難であった。近年のお城ブームも相まって、坂本城を訪れる人々は増加しており、遺跡の現状を記録して保存処置を施すことが喫緊の課題となっていた。

研究成果(シーズ)の還元

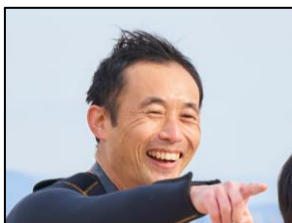


2023年末～2024年2月は琵琶湖の水位が基準水位から約80 cm低下し、湖中石垣とその周辺が露出した。このタイミングで本学歴史遺産学科では大津市文化財保護課と連携し、陸上から水中にかけて出土した土器や陶磁器の位置情報取得と取り上げ、湖中石垣とその周辺の三次元計測を実施した。これらの作業にはGISS(地理情報システム)を活用した。

本調査では坂本城湖中石垣の現状を詳細に把握し、左記の課題解決に還元することができた。本学科では水中遺跡の調査にGISSや三次元計測を導入しており、調査に必要な特殊機材、ダイビングライセンス所持者(教員、学生)も在籍している。

今後、各地の水中遺跡の保存・活用に活かしていきたい。

この連携に携わった研究者



文学部 歴史遺産学科
南 健太郎 准教授

(研究者からのメッセージ)

日本における水中遺跡の詳細分布調査はまだ始まったばかりです。水中と陸上の遺跡から得られる情報を総合することで、より豊かな地域の歴史像を描くことができます。水中遺跡の所在把握には特殊機材やライセンスが必要な場合もあります。

今後、各地の自治体と協力し、本学科の技術を活かして、水中遺跡の保護や活用を推進できたらと思います。